

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 28 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2009～2012

課題番号：21720129

研究課題名（和文）

学際的アプローチによる中国－欧米間映画関係史構築に関する研究

研究課題名（英文） Sino-Western History of Interactivity in Cinema: Establishing an Interdisciplinary Approach

研究代表者

菅原 慶乃（ SUGAWARA YOSHINO ）

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：30411490

研究成果の概要（和文）：

20 世紀初頭の中国映画界は、他の東アジア諸国と同様に、外国映画、とりわけアメリカ映画界の影響を強く受けてきた。近年、実証的手法による中国映画史研究の領域においても、中国と外国との映画関係史にかんする研究は注目を集めてきた。しかしながら、この研究領域には、学際的視座の導入、産業史的空白の補充、そして新資料の開拓といった様々な課題が残されている。本研究ではこれらの課題を克服し、中国映画史再考のための新たな研究アプローチを構築すべく、基礎的研究を行った。その結果、「外国映画による中国映画市場の壟断」という、従前の研究が採用してきた研究上の前提をさまざまな角度から再考する必要性を提示した。

研究成果の概要（英文）：

During the early twentieth century, filmhood in China and other Asian countries was strongly influenced by foreign cinema, particularly American. In recent years, the interactivity between Chinese and Western cinema has drawn attention from scholars both in and outside China; related works have continuously been produced using primary historical sources. However, these studies are still deficient in at least three aspects: interdisciplinary approaches; accumulation of research outcomes, particularly in the film industry; and diversity of historical resources. By overcoming these deficiencies, this research established a new analytic aspect in Chinese film history and conducted preliminary surveys. The necessity of rethinking the generally accepted premise that foreign cinemas suppressed the Chinese cinema market was submitted as the most important result of this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・各国文学・文学論

キーワード：中国文学

1. 研究開始当初の背景

中国映画史研究は1990年代以降目覚ましい変化を遂げた。従前、政治イデオロギー色を濃厚に反映した作品解釈史が主流を占めていた傾向は急速に希薄化し、代わりに新資料を用いた実証研究へと大きな転換が果たされた。同時に、その研究対象も、単純な作品論・作家研究の範疇を超え、多様化の様相を見せ始めた。これらの新しい研究は、いずれも過去の映画史研究を批判的に継承しながら中国映画史研究の新たな可能性を模索する試みであるといえる。

しかしその一方で、ディシプリン全体を見渡すと、諸処の克服すべき課題が未だ残されていることは否定できない。第一に、新しい視座からの研究が一定の蓄積をみせた現在においてもなお、映画を、それを取り巻く文芸、社会、文化の総体的文脈に置き、その意義を見出すようなマクロな視座からの研究が確立しておらず、全体として断片的で個別性の強いテーマ研究が主流を占めている点が挙げられる。次に、映画産業史の分野における実証的研究が、作品・作家研究や制度史研究等に比して極めて脆弱である点がある。第三に、中国映画と諸外国の映画、とりわけアメリカ映画との関係に着目した研究が隆盛している一方で、その研究視座は中国側に立脚したものが多数を占めており、分析に際して参照される資料も、ごく一部の例外を除き、ほとんどが中国で発行されたものに限られているという点がある。

2. 研究の目的

本研究は、前述した課題を克服しうる学際的なアプローチを模索し、とりわけ中国と諸外国（特にアメリカ）間の関係史を中核とした新たな映画史研究の構築を目指したものである。具体的には、新史料の発掘を通じて映画産業・映画美学・映画制度の各領域を融合させた学際的なアプローチを模索し、中国と外国、とりわけアメリカとの映画関係史を再構築するにあたって有効な、新たな分析的枠組みを提出することを目的とした。

研究を実際に遂行するにあたり、最も中心的な課題として設定したのが、従前の中国映画史研究において研究的蓄積が極度に少なかった映画産業史において実証的研究の成果を積み上げる作業である。従来映画史研究では研究対象として取りあげられたこと

がほとんど無かった映画の非商業上映活動、産業映画や教育映画等の非劇映画受容史の概要把握も射程に含めた。

次に設定した課題は、中国と諸外国との映画関係史研究における根幹的枠組を再考する作業である。具体的には、中国と諸外国との関係が語られる際にほとんど無条件で前提とされてきた「外国映画による中国映画市場に対する抑圧と壟断」という二項対立的言説の系譜をトレースし、実態と照らし合わせた時に、このような言説が如何なる意味を持っているのかを示すことを目的とした。また、従来の映画関係史では主に中国側の立場に立った記述や中国側の資料の偏重が際立っていたが、本研究においては外国側からの視座、資料を導入し、両者の関係史の再構築を目指すべく基礎資料の収集、概要の把握も目的に含めた。

3. 研究の方法

上述のように、本研究は（1）初期映画産業史の解明、（2）中国映画界と外国映画界をめぐる二項対立的言説の再考、という二つの具体的な目標を設定したが、これを遂行するにあたり、それぞれについて以下のような手法を採用した。

（1）初期映画産業史の解明について

a. 中国映画制作業が勃興した1920年代に焦点を絞り、当該時期に設立された映画制作会社の数量、資本の規模、設立発起人のバックグラウンドを中心に徹底的な資料収集を行う。

b. 1920年代に中国映画制作が産業化された直後、その配給上映網がどこまで拡大したのか、また配給・興行会社と制作会社との関係は如何なるものであったのかを解明するために、資料収集、分析を行う。

a、bともに収集の対象とした主な資料は各地で発行されていた日刊紙で、とりわけ『申報』・『新聞報』・The North China Daily News（以上いずれも上海）、『南洋商報』・『星洲週報』（以上シンガポール）、中国各地の地方紙（天津『益世報』、杭州『杭州民国日報』、漢口『漢口民国日報』等）を主たる分析対象とした。

(2) 中国映画界と外国映画界をめぐる二項対立的言説の再考

a. 「外国映画による中国映画市場対する抑圧と壟断」という言説を、主として中国における国産映画制作業勃興期の 1920 年代を中心に焦点を充て可能な限り収集し、そうした言説と映画産業界の実態との関連を実証的に考察する。

b. 中国映画界と外国映画界をめぐる二項対立的言説が定着する以前の 1910 年代を対象として、両者の非対立的な関係を結んでいた具体的事例を可能な限り収集し、諸相を提示する。

c. 1920 年代～1930 年代におけるアメリカ映画界の中国映画市場に対する関心を解明すべく、アメリカ側の資料、特に駐上海アメリカ領事館や商務省内外通商局上海事務所の関連文書を収集し、分析する。

調査対象とした資料は、a、b については主に上海で発行された新聞や雑誌、各映画会社が発行していた「特刊」等に掲載された関連記事とした。c については、アメリカ国立公文書記録保管局所蔵の國務省及び商務省の関連文書を中心に調査、収集した。なお、これに付随する情報を得るため、イギリス国立公文書館所蔵イギリス外務省による上海の映画事情関連文書に対しても調査を行った。

4. 研究成果

前項までに述べた二つの目標にかんして、本研究では以下の成果を得ることができた。

(1) 初期映画産業史の解明

a. すでに述べたように、中国映画史研究の中でも産業史における実証的研究の蓄積は従前極めて脆弱であった。本研究では、筆者の置かれた環境下において入手できる一次資料を可能な限り収集・分析し、中国、とりわけ上海で 1920 年代に興された映画関連会社を網羅的に把握した。このうち映画制作会社については 2010 年 4 月に論文「1920 年代上海における映画制作会社について」として発表した。なお同論文は中国でも翻訳・公開したことを付言しておく（菅原慶乃訳「一九二〇年代上海的電影制作公司；以文芸界人際網絡為基礎的電影制作業的展開」『現代中文学刊』、2011 年第 1 期（総第 10 期）、pp.11-23）。

b. 国産映画制作業黎明期において、多くの華僑が住まう南洋はすでに国産映画市場の大きなシェアを占めており、その影響力は無視できないものであったことが知られている。しかしながら、従前の映画史研究では国

産映画市場の拡大にかんする体系的な研究がほぼ皆無であった。本研究では 1920 年代の上海から、南洋市場の中でも特に重要だったシンガポールへ拡大していった中国映画市場の実態を概観した上で、両者の間に築かれた関係性や、それが国産映画制作の現場に与えた具体的影響について浮き彫りにした。この成果は論文「越境する中国映画市場」として公表され、第 8 回太田勝洪記念中国学術研究賞（一般社団法人中国研究所）を受賞した。

また、国産映画市場の南洋への拡大の過程で特に重要だった配給会社「六合影片営業公司」については、通説の検証を迫る新たな史実を発見した。この成果は国際シンポジウムで発表した後（タイトルは「六合影片営業公司再探」）、共著として北京大学出版社より刊行された（成果の概要については次の記事を参照されたい；彭侃「国際会議呈現華語電影工業研究新方向」『伝媒透視』2010 年 11 月号、当該記事はウェブ上でも閲覧できる：<http://rthk.hk/mediadigest/pdf/201011.pdf>）。

(2) 中国映画界と外国映画界をめぐる二項対立的言説の再考

a. 1920 年代の上海映画界において散発的に起こった外国の映画会社批判の系譜を整理したうえで、とくに 1925 年に盛んに行われた英美煙公司影片部に対する映画ジャーナリズムによる批判を再検証した。その結果、これらの批判言説が具体的に挙げていた同部の「壟断」状況が、必ずしも同部の資本金や人脈、作品内容、そして配給・上映網の実態と一致していない事を、限られた資料にもとづきながら可能な限り実証した。その結果、「外国映画の壟断」というのは、実態そのものよりも映画界におけるナショナリズムを正当化するイデオロギーとして作用していたケースが少なくなかった可能性を指摘した。同時に、「外国映画による中国映画市場の壟断」という、この領域の研究における前提の再検証が必要であることを提起した。これらの成果は前述の論文「1920 年代上海における映画制作会社について」で示した。

b. 「外国映画による中国映画市場の壟断」という枠組みから逸脱するような中国映画と外国映画の相互補完的な関係の有様を、1910 年代を中心に確認した。成果として、中国映画界における「近代」の受容の過程とは、必ずしも「進んだ西洋」と「遅れた中国」との明確かつ強固な対比が支配的だったわけではなく、中国の映画界が「進んだ西洋」とほぼ同時代的に、西洋と同様の「近代性」を謳歌していた諸事例が導き出された。その一端を、中国最初の長篇劇映画『閻瑞生』の誕生経緯とからめ、論文「変奏される『閻瑞

生』として発表した。また、従前映画史研究で無条件に看過され続けてきた映画の非商業上映の重要性に着目し、1910年代の上海 Y.M.C.A.における非営利映画上映活動の映画史的意義をまとめ、論文として刊行した（後掲「『猥雑』の彼岸へ」）。

c. 中国と外国（とくにアメリカ）との映画関係史をあつかった従前の研究は、ごく限られた一部の研究以外は、多くが中国側の資料のみに依拠して行われることが慣例であった。アメリカ側の資料を用いた一部の研究であっても、その資料は断片的であった。このような状況は、単に資料の偏重という問題を顕在化させているのみならず、上述したような「外国映画による中国映画市場に対する抑圧と壟断」という枠組みが無条件に受容されている研究的土壌そのものを補強してきたという問題をも孕んでいる。そこで本研究では、アメリカ側の資料、特に商務省が中心となり推進していた、貿易商品としてのアメリカ映画の対東アジア輸出策に関する徹底的な一次資料の発掘を行った。収集された資料は体系的に整理したうえで、中国側資料とのクロスチェックを行った。その成果は、本研究の成果として発表した論文や学会発表で十分に活用されている他、「アメリカの中国映画市場への関心」として発表した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

①菅原慶乃、「猥雑」の彼岸へ——「健全なる娯楽」としての映画の誕生と上海 Y.M.C.A.、『映像学』、査読有、第90号、2013年、41～56頁

②菅原慶乃、変奏される『閻瑞生』——民国期上海の視覚文化におけるリアリズム志向と扇情、『野草』、査読有、第89号、2012年、1～29頁

③菅原慶乃、越境する中国映画市場——上海からシンガポールへ拡大する初期国産映画の販路、『現代中国』、査読有、第85号、2011年、59～71頁

④菅原慶乃、六合影片営業公司再探、『華語電影工業：方法与歴史的新探索』（国際シンポジウム予稿集）、査読無、2010年、1～10頁

⑤菅原慶乃、1920年代上海の映画制作会社について——文芸関係者による人的ネットワークを基盤とした映画制作業の展開——、

『関西大学東西学術研究所紀要』、査読無、第43輯、2010年、95～118頁

⑥菅原慶乃、アメリカの中国映画市場への関心——1920年代を中心に、『東方』、査読無、第347号、2010年、2～6頁

〔学会発表〕（計4件）

①菅原慶乃、民国初期における映画の非商業上映——上海基督教青年会による映画上映活動の映画史的意義を中心に、日本現代中国学会2012年度関西部会大会、2012年6月9日、於摂南大学大阪センター

②菅原慶乃、六合影片営業公司再探、華語電影工業：方法与歴史的新探索（国際シンポジウム）、2010年10月8日、於香港浸会大学

③菅原慶乃、資本的・制度的越境としての「外国籍」映画会社、関西大学東西学術研究所2009年度第6回定例研究会（比較映像文化班）、2010年1月22日、於関西大学東西学術研究所

④菅原慶乃、1920年代上海の映画制作会社に関する一考察、科研費（萌芽）「植民地期台湾映画フィルム史料の歴史学的整理分析」定例研究会、2009年7月12日、於日本大学文理学部

〔図書〕（計1件）

①葉月瑜主編、『華語電影工業：方法与歴史的新探索』、北京大学出版社、2011年12月、総450頁（分担執筆部分：「六合影片営業公司再探：以早期中国電影市場的拡大為中心」、95～120頁）

〔その他〕

ホームページ等

関西大学学術情報システム

<http://gakujo.kansai-u.ac.jp/profile/ja/9ba7ae8c3ed1990cJUCRed88faaa.html>

関西大学文学部菅原慶乃研究室

<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~sugawara/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

菅原 慶乃 (SUGAWARA Yoshino)

関西大学・文学部・准教授

研究者番号：30411490